

林業史と高齢者の地域知を活かした 地域学習プログラムの開発

— 士別市朝日町の事例 —

北海道博物館 青柳かつら



■はじめに

近年、北海道では、大幅な人口減と高齢化が進行しており、自治体の存続や、産業・くらしの活力低下が心配されています。この解決には若者の雇用創出や住民の地域意識を促すことが欠かせません。他方、これらのベースとなる方策の1つとして、高齢化をネガティブに捉えるばかりでなく、高齢者が持つ地域独自の知識（地域知）を積極的に活用して、地域の個性や暮らす誇りを産み出す地域学習を各地へ拡げることが重要です。さらには、地域博物館がこの拠点として、知識の集積や人材の交流の場となれば、超高齢社会における博物館の役割発揮につながります。

こうした着眼から、筆者は、北海道北部の山村地域、士別市朝日町にて、後述する協力組織と連携して、地域知を活かした地域学習プログラムの開発・実践を行ってきました。本稿では、同町の林業史、これにまつわる高齢者の地域知を活かした地域学習プログラムの展開事例、その活動効果について紹介します。

■士別市朝日町の林業史

朝日町は、旧士別御料林である4.8万ha（森林率92.5%）の森林を有し、その豊富な森林資源から林業の町として発展しました。大正期には、現朝日町域や現士別市街に木工場や木挽工場が創業し、士別御料林の林産資源の利用が拡大しました。町内外から集まった大勢の林業労働者が冬期間の副業として造材現場で働き、士別までの木材輸送は馬搬または流送が行われました¹⁾。1932-58年には、現朝日町中央一奔（ぼん）天塩（30.5km）に敷設された士別森林鉄道によって木材が搬出されました²⁾。

1947年の林政統一によって士別御料林は旭川営林局管轄の国有林となりました。町域である朝日営林署管内の伐採材積量と町人口をおおよそ5年毎に示した表1を見ると、伐採材積量は、1954年の台風15号による風倒木被害発生後、1955年に最多23.1万m³に達しました。この林業の活況に支えられて町人口は増加し、1960年に6,754人と最多になりました。しかしそ

の後、木材生産は縮小し、基幹産業が農業へと変わる中で、伐採材積量と人口は減少し、1990年には4.6万m³、2,408人となりました。2020年現在の町域の人口は1,124人、高齢化率は57.8%です³⁾。

表1 朝日営林署伐採材積と朝日町人口の推移

	朝日営林署伐採材積量 (万m ³)	朝日町人口 (人)
1952年	13.0	5,608
1955年	23.1	6,145
1960年	19.9	6,754
1965年	15.1	6,141
1970年	12.1	5,101
1975年	8.7	3,713
1980年	6.9	3,133
1985年	5.5	2,862
1990年	4.6	2,408

出典：旭川営林局統計書、住民基本台帳人口をもとに作成

■連携事業による地域学習プログラムの開発

士別市朝日町には、地域博物館であり、学芸員の配置がない、朝日郷土資料室、同室の運営を支援するボランティア「知恵の蔵運営員会」（以下、知恵の蔵）があります。同委員数は2024年現在20人で、中心は65歳以上の高齢者です。同室の展示室オープンに伴い、農林業・生活の道具等の博物館資料の名称や使い方を調べる際に、地元の高齢者有志が協力したことを契機に、知恵の蔵が組織化され、2006年から活動しています。

筆者と同室・知恵の蔵が連携して開発・実施した、林業の歴史と高齢者の地域知を活かした下記1)～3)の地域学習プログラムと主な活動効果を以下に記載します。

■1) 林業技術の再現と短編映像の作製

同室を会場に、山子（伐木をする林業労働者）、馬追い（丸太を馬搬する林業労働者）といった経験者に集まって頂き、鋸を目立てする、サツテ（斧）を研ぐ、トビで丸太を動かす、丸太を橇（そり）に載せる

といった技術を再現し、映像記録しました（写真1）。例えば、鋸の目立てでは、「①天摺（ず）り（歯の高さをそろえる）」「②摺り込み（脇目を研ぐ）」「③頭を研ぐ（上目を摺り落とす）」「④あさり出し」といった工程を、窓鋸^{注1)}、平ヤスリといった、昭和期に使用された同室所蔵の実物資料を活用して、ビジュアルに記録することができました。



写真1 窓鋸の目立て再現映像の製作

映像は視聴しやすさに配慮し、1～2分程度の短編映像に編集しました。この短編映像は、林業用具の実物資料、展示パネルとともに、2021～22年度道北地区巡回展示会「探してみよう！ 地域のお宝」（士別市・名寄市・美深町・美瑛町で開催、写真2）で一部公開するなどして活用しました。



写真2 道北地区巡回展示会「探してみよう！ 地域のお宝」（士別会場、撮影：士別市立博物館）

■2) サロンの開催と聞き取り記録集の作製

高齢者を参加者に、昭和期の林業労働の記憶について語るサロン（談話会）を開催しました（写真3）。サロンは、高齢者へのポジティブな効果を期待して、グループ回想法^{注2)}を意識して行いました。

サロンでは、例えば、以下のように高齢者の地域知

が語られました。山子の経験者からは、同町では1948年頃に4枚抜きの窓鋸が使われ始め、それまでのバラメ鋸（天王寺鋸）と比べて、押し引きが楽で鋸屑が詰まらず、硬い木がよく切れる利点があったこと、窓鋸の目立ては難しく、鬼歯を他の歯よりもわずかに低くすることが大切で、歯の調節具合で鋸の効率は大きく変わったこと、伐採量は、地形条件による差や個人差がありましたが、バラメ鋸では10～30石（約2.8～8.3m³）/日・人であったものが、窓鋸では20～40石（約5.6～11.1m³）/日・人に増加したことなどが語られました。こうした高い作業効率は、当時の同町内の森林資源が豊かで、大径木を多数伐採できたことによるものと思われます。

馬追いや木直し人夫（丸太を馬道まで人力で運ぶ林業労働者）の経験者からは、造材作業で使われた「ヒツキリン」とよばれるトビ、そして、ツメの付いたトビの使い方について、「鋭利なヒツ刃の部分が、てこの原理を働かせ、丸太を楽に動かせる」「ツメが丸太に食い込みトビが滑らなくなる」といった従来品と比べての利点が語られました。てこの原理で丸太を動かすトビは、刃の先端部が特に重要であることを示す「トビ先三寸（約9.1cm）」という言葉も挙げられました。こうした回想は、1928年より朝日町で営業し、高品質のトビ製造者として有名だった後藤鉄工場のトビ製品のカタログを見たり、資料室の実物資料を手にして、動作を再現しながら行われました。



写真3 サロン「馬追いの技術と道具」

サロンの成果は、記録集（書き起こし）を作成して、他の地域文化の思い出をテーマとする内容と合わせて報告書として刊行しました⁴⁾。このうち、青柳ほか⁶⁾の抜粋PDFは北海道博物館のホームページ（HP）で公開しています^{注3)}。

サロンで思い出話によって仲間と楽しい時間を過ごしたことや、報告書刊行という、地域文化のアーカイブ（記録保存）に関わったことは、サロン参加者の社会参加を促進させ達成感をもたらし、高齢者のウェルビーイング（幸福感）に貢献しました⁷⁾。

■3)「士別市朝日町 知恵の蔵おすすめマップ」の製作

2012～13年には、「町内で自分が好きなもの・場所」「今後もっとPRしたいもの・場所」の二方向から、町内の地域資源を検討し、10回のワークショップを重ねて、「士別市朝日町 知恵の蔵おすすめマップ」を製作しました（写真4）。



写真4 マップ製作のワークショップ
(女性チーム, 2012年)

同マップでは、天塩岳の自然、祭りや芸能、食文化など様々な地域資源を取り上げました。林業関係では、木直し人夫が4～5人の組になって、木直し唄でのかけ声に合わせて丸太を動かす「木直し」習俗のイラストを表紙に掲載したり、町内に残る産業遺産として、士別森林鉄道の軌跡（写真5）を『『林業のまち朝日』の歴史』というキャッチコピーとともにイラストと文章で紹介しました。

マップ刊行は、複数の地方紙で報道され（写真6）、「地域に根ざしたマップ」として好評価を得て、知恵の蔵委員の間には、マップを使って町内外に地域の魅力を発信する意欲が高まりました。まず、知恵の蔵の内部行事としてマップ掲載地ツアーが行われ、委員はお互いにガイド役を務め、町内の地域資源について学習しました。さらには、知恵の蔵が企画者となり、町内の組織機関と連携して、ツアー型の公民館講座を開催しました。このように、マップ製作は、同町の社会教育・地域づくりの取り組みに発展しました。



写真5 士別森林鉄道の軌跡：サックル沢の石垣跡
(知恵の蔵行事「ふるさと再発見の旅」, 2012年)



写真6 マップ完成記念写真
(新聞・情報誌等の記事に掲載, 2013年)

■地域学習プログラム集の刊行

2018～22年には、映像資料学、高齢者福祉の研究者らとも連携して、地域学習プログラム集の刊行に取り組みました。地域学習プログラムのテーマは、農林業、商工業、生活文化、環境（天塩川の水害）等です。読者が自分の地域で地域学習プログラムを展開できるノウハウ集として、企画運営の手法をとりまとめました。

林業に関連する内容は、「馬追いの集材技術」などのプログラム2本です。同室が所蔵する昭和期の集材作業の写真や実物資料をサロンの素材として活用する手法や、ペン、小箱などの文房具を丸太や集材用櫓に見立てて簡易な模型とし、集材作業の工程を語り合う手法なども解説しました。

本プログラム集⁸⁾（写真7）は全文のPDFを北海道博物館のHPで公開しています^{注3)}。これまでに、情報誌などのメディア、地域学習や高齢者向けプログラムに興味を持つ道外自治体、留学生などから問い合わせ

があり、関心の高さを感じています。



写真7 地域学習プログラム集表紙（2023年刊行）

■おわりに：まとめと今後の発展方向

高齢者と協働した地域学習プログラム開発を通じて、朝日町の林業史等のアーカイブが進み、巡回展示会などを通じた町内外への普及、公民館行事企画など地域づくりへの波及、活動に参加する高齢者の社会参加、ウェルビーイング等が実現できました。

一方、同町では、高齢化の進展とともに、これまで主要な活動の担い手であった昭和一桁生まれの高齢者の引退が見られ、後継者の確保が重要となっています。

山村の地域文化、昭和初期の林業史を大切に扱いつつも、より広範な内容、時代の新しい事象に学習テーマを拡げていくことが重要です。

例えば、戦後の産業やくらしの変化に関連する、学校生活の変遷、農林業の機械化、高度経済成長期といった学習テーマを練り込み、昭和10年代後半～20年代生まれ以降のより若い世代も参画していける地域知収集を、地域博物館と連携・協力しながら進めていくことが課題です。

注1：鋸断のための2～8枚の歯と鋸屑をかき集める鬼歯の後に、鋸屑の目詰まりを防ぐ窓（窪み）がつく鋸のこと。窓は、当初の歯6～8枚間隔から、4枚間隔、2枚間隔につくようになり、徐々に窓の数が増

えていきました。写真1は2枚間隔（2枚抜き）の窓鋸です。

注2：過去の経験を語り合うことで脳を活性化させ、心を元気にする手法である回想法をグループで行うこと。回想法は、認知機能やQOLへの効果が報告され、認知症の予防や進行抑制の点からも注目されています。

注3：<https://www.hm.pref.hokkaido.lg.jp/post/news/detail21740/>。「北海道博物館（トップページ）」「お知らせ一覧」「2023年3月16日」からアクセスできます。

■引用文献

- 1) 朝日町編：朝日町史，1981.
- 2) 旭川営林局：旭川営林局史. 1，1960.
- 3) 士別市：2023年版士別市統計書. 19，2024.
- 4) 青柳かつら：士別市朝日町の農林業の歴史と文化：聞き取り調査の記録，JSPS科研費24700938報告書2，北海道開拓記念館，2015.
- 5) 青柳かつら：士別市朝日町の歴史と文化：回想法サロンと異世代交流の記録，JSPS科研費15K01153報告書2，北海道博物館，2018.
- 6) 青柳かつら・山下俊介・黄京性：高齢者のウェルビーイングを創成する地域学習コンテンツの開発：北海道北部地域における回想法サロンと聞き取り調査・地域映像活用・認知症予防活動の記録，JSPS科研費18K01108報告書2，北海道博物館，2023.
- 7) 青柳かつら・山下俊介・黄京性：少子高齢社会のウェルビーイング創成型地域学習コンテンツの開発（Ⅲ）：高齢者の地域知を活用した地域学習と巡回展事業，北海道博物館研究紀要7，pp.47-66，2022.
- 8) 青柳かつら・山下俊介・黄京性：探してみよう！地域のお宝 高齢者と協働する地域学習プログラム集，JSPS科研費18K01108報告書1，北海道博物館，2023.

■謝辞

本稿をまとめるにあたって、朝日郷土資料室、知恵の蔵運営委員会、士別市立博物館の皆様にお世話になりました。本研究はJSPS科研費24700938，同15K01153，同18K01108の助成を受けたものです。深くお礼申し上げます。